



# 世なおしは 食なおし

NPO法人東北開墾 代表理事

**高橋 博之さん**

【岩手県】

くらし

食を守る



## 高橋 博之さん

岩手県議会議員を務めていた高橋博之さんは、震災直後の被災地を訪れる中でNPO法人「東北開墾」の発足を決意した。「食」をテーマに活動することを決め、「東北食べる通信」という地域の食べ物を付録とした雑誌を創刊した。生産者の哲学や背景を取り上げた雑誌とともに、届けられる新鮮な食材。東北食べる通信の先進的な考え方や、地域社会が抱える課題とそこから見える可能性を語つていただきました。

### 中高校生へのメッセージ

思い通りにならないことがあっても、受け入れよう。僕自身、新聞記者になりたいと思って文章を書いたことや、議員の体験など、やってきたことに無駄なことなどひとつもありません。人生には限りがあります。今を一生懸命生きることはめず、未来の自分に伝わります。

私は、姉が障害を抱えていたこともあって、子どものころから効率という物差しだけでは測れない豊かさがあるという思いを常に持っていました。震災でその思いが一層強くなり、人間の共通点であり、命の源である「食」を改めて見直すきっかけになりました。そのことが食べる通信誕生の原動力にもなりました。

実は、食べる通信は1誌の購読者は1500人という上限を設けています。目指すところは大量生産や効率主義ではなく、顔が見える関係だからです。1誌ごとの上限を設ける代わりに、全国へさらに展開したいと考えています。まずは100の食べる通信を刊行すること。そして、日本の食の流通の15%は生産者の顔が見えるようにします。

### 将来的ビジョン

している自分に急に嫌気がさし、これまで口で言つてきたことを、実際に自分の手や足を動かしてやつてみたい、と政界引退を決意しました。農家や漁師の近くで仕事をし、形にしたいと決意し、石巻の牡鹿半島にある牡蠣養殖の手伝いを始めました。そこで知つたのはあまりにも安い牡蠣の出荷価格でした。

牡蠣を適正な価格で販売するために、漁業の価値を消費者に伝える取り組みが必要だと考えました。そして誕生したのが食材を特集した記事と、その食材を付録として届ける「東北食べる通信」です。構想からわずか3ヵ月後の2013年7月、創刊しました。この取り組みは全国展開し、今では34の食べる通信があり、9000人以上の読者がいます。

### 震災から現在

地震が起きたとき、私が委員会室で議案の審議をしていました。審議は中断。テレビの画面を通して目に飛び込んできたのは、人がつくれた町が自然の力で押し流される光景でした。言葉がありませんでした。数日後、食糧などの支援物資を集めて被災した沿岸部に行き、その日から大槌町を拠点に支援活動を始めました。内陸部で育った私はそこで、漁師から初めて直接話を聞き、漁業が直面している問題を深く知ることになりました。

震災の年の7月、岩手県知事選に立候補をすることを決意し、県議を辞職。とにかく現場で被災者一人ひとりと話をしたいと、徒歩で遊説を続けました。結果は落選。完敗でした。それでも、4年後の次の選挙を見据え、また街頭演説を始めました。しかし、言つてしまえば自分の顔と名を売るために口ばかりの選挙活動を

### 震災以前のこと



花巻で生まれ育ち、大学進学で上京しました。当時は新聞記者を目指していて、直接喋れるエピソードがないかと考えていた

ときに、大学の先輩で代議士をやっている方がいて、事務所を手伝わなかと声をかけていただいたんです。「これは面接受けする」と考え、手伝いを始めました。結局、新聞社はすべて落ちたのですが、このことが政治に興味を持つきっかけになりました。

29歳のときには、郷里に帰って議員を目指しました。帰った次の日には街頭に立ち、演説を始めました。ゼロからのスタートです。31歳のときに岩手県議会議員の補欠選挙で当選し、2期目の途中で震災が起きました。